

Pay Forward

第8期 荻野 真央

『ペイ・フォワード possible王国』という映画がある。僕の大好きな一作だ。

ある中学校で、社会科のシモネット先生は生徒にこう問いかけた。「もし自分の手で世界を変えたいと思ったら、君達は何をする?」。そんな課題に対し、中学1年生のトレバー少年が思いついた方法は“ペイ・フォワード”——人から受けた思いやりや厚意を相手に返す (Pay Back) のではなく、また別の3人に与える (Pay Forward) ——というものだった。かくしてトレバー少年は、この方法を実践し、広めることで、世界を変えようと試みる…という物語だ。

これから僕が記すことは、小野ゼミで過ごした2年間の思い出話でもなければ、お世話になった方々への感謝の言葉でもない。9期生をはじめ、次代に遺しておきたい僕の意志である。

どれほどの厚意を僕は享受しただろうか。3年生の春合宿、「小野ゼミを卒業するときに泣いちゃうぐらい全力で頑張りたい」というとても安直な理由でゼミ長に立候補した僕を待っていたのは、想像の10倍エグいゼミ長のタスクに忙殺される毎日だった。マネジメント能力だとか、プレゼン能力だとか、カリスマ性だとか、甲斐性だとか、そんなものは一切ない僕が、不出来ではあるが、この2年間、小野ゼミでゼミ長をやらせてもらえたのは、ひとえに小野先生や7期生、そして同期生の理解と協力の御陰様である。僕を育み、愛してくれたその厚意は、僕の血肉であり、かけがえのない財産なのだ。

どれほどの厚意を僕は与えることができただろうか。9期生を迎え入れた2011年4月7日から、僕の頭の中は「先輩として規範たらねば」というもので一杯だった。この気持ちを持ち続けて、9期生の皆には接してきたであろう。こんな自分が後輩を教え、育てることができるのかという不安に苛まれた。同時に、改めて7期生の偉大さを痛感した。そんな中でも、この1年間、自分が持てるすべての時間を使って、自分が出来るすべての後輩指導を成し遂げたつもりである。僕の姿が9期生にどう映っているのかはわからないが、僕の厚意が伝わってしてくれたのなら、先輩として冥利に尽きる。

小野先生や7期の先輩方、同期の皆には大変申し訳ないが、僕は自分が享受した厚意を恩返しするのではなく、そのすべてを9期生に引き継ぐことに徹した。それが僕なりの『小野ゼミを変える』方法だ。

次代の小野ゼミ生よ、どうか厚意を途絶えさせないでほしい。君達が小野ゼミで得たすべての財産を、さらに次代の小野ゼミ生へと引き継いでいってほしい。“ペイ・フォワード”——これこそが、僕が望んでやまない『小野ゼミの伝統』である。